道

発　行　真言宗豊山派　霊松山歓喜院
金　剛　寺
〒371-0241　前橋市苗ヶ島町 1147
TEL 027(283)6918 FAX 027(283)6815
http://www.raijin.com/kongouji/

「夜空の月」

天龍山満徳寺　住職
福島県白河市
潮地龍勝（しおちりゅうしょう）

金剛寺御山主である志田洋遠僧正に初めてお会いしたは、平成十八年九月のことです。福島県中部の医王山龍角寺本堂落慶大法要にて私が大導師を務めた際にご縁をいただきました。志田僧正はとても気さくで話も面白い方で、以来、今日に至るまでお付き合いをさせていただいております。平成三十年五月には、志田僧正の提案で営まれた広島の原爆慰霊碑前での法要に参加させていただき、平和への気持ちを新たにいたしました。

私は福島県白河市の満徳寺の住職を務めております。本尊は大日如来です。満徳寺は周辺に雑木林が生い茂り、田んぼや畑が広がる非常にのどかな環境にあります。春になると境内に生える樹齢およそ四百年のしだれ桜が咲き誇ります。それに加えて、長年の間に檀家の皆さまの協力のおかげで植えられた芝桜・ツツジ・もみじ・紫陽花などが季節折々で彩り鮮やかに花を咲かせます。そういった環境の中で自然の移り変わりを目の当たりにしながら日々を送っておりますと、便利さや刺激などは都会に遠く及びませんが、自然の営みを身近に感じられるのが田舎のいいところなのではないかと思います。夜には星や月もはっきりときれいに見えます。今回、志田僧正より原稿依頼を受けまして、何について書かせていただこうかと考えあぐねていたところ、夜空に丸い月が浮かんでおりまして、しばらく見入ってしまいました。

月について少し書こうと思います。

真言宗の行者にとって大切な論書である『菩提心論』には「我れ、自心を見るに形、月輪の如し、何が故にか月輪を以って喩えとするとならば、満月円明の体は、即ち菩提心と相類せり」と書かれています。自分の心を見つめると、その形は月輪のようである。どうして月輪に例えるかといえば、満月の丸く明るい姿というのは、悟りを求める心と似ているからだ、ということです。つまり、私たち誰もが仏性を具えているのです。

それを感じるための密教の瞑想法として、月輪観というものがあります。真言宗の中興の祖である覚鑁上人は、この瞑想法に関する『月輪観頌』という著作を残されています。月輪観の心得が記されており、その中に、「若し心散乱せば、制して一処に止めよ　若し心沈没せば、了々として分明なれ」という一節があります。もし心が乱れたならば、制して心をひとつにしなさい、もし心が分からなくなってしまったら明らかにしなさい、といった意味かと思います。「若し～ならば」という部分は、覚鑁上人がそれを経験しているから書けるのだろうと思うのです。どんな優秀な名僧であっても、時に心が乱れることも、分からなくなってしまうこともあったのではないでしょうか。だからこそ、それを教えとして記した覚鑁上人の優しさや誠実さが垣間見え、苦悩する人間らしさに励まされるような気がします。

人間ですから、日常の中で些細なことに気持ちを揺さぶられ迷走したり、落ち込んだりすることもあるでしょう。先が見えず、闇夜に放り出されたような気持ちになることもあるでしょう。しかし、そういう時こそ、顔を上に向けて、美しく清い光を放つまん丸なお月さんのような仏性が自分には具わっているのだということを思い出したいものです。

さて、月はどうして光って見えるのか。ご存じの通り、太陽の光を受けているからです。この太陽はお天道さんとも呼ばれます。私は「お天道さんが見ているぞ」と子どもの頃大人からしばしば言われたものです。お天道さんが何を指しているかについては諸説ありますが、我々にとっては大日如来に他なりません。そして、この世の森羅万象の全ては大日如来の現れなのだと考えれば、私たちは常に大日さんとともにあり、そして生きているのです。

密教は、生命の肯定を高らかに謳っています。生きることは、楽しく素晴らしい。そう主張しているのです。ですから、自分を見つめ、一生懸命生きようではありませんか。そうして一人ひとりが自らの仏性に目覚めれば、人の役に立とうとか、他人の幸せに貢献しようという利他の気持ちにもつながるはずです。

人生を楽しもうではありませんか。

「葬儀の違い」

横浜市　金　哲煜（きん　てついく）

不思議な縁で、「変わった日本のお坊さんがいる」と、父から聞かされたのが二十年程前の話で、実際日本に来て、志田先生とお会いした時、日本という要素を取り除いても、変わっているお方だなぁという印象があった。その先生から、中国の葬儀について、文章を書いてくれと言われ、ここに至ったわけである。

四十五歳にしては、僕は同世代の人より多く、葬儀に立ち会ってきた気がする。爺さん婆さんならまだしも、自分の親友だったり、同級生だったり、弟だったりすると、やはりいろいろ考えさせられる。そもそも動物と違って、人はなぜ葬儀をやるのだろうと考えた時、死者だけではなく、生きている人のためでもあると思うようになった。ということは、葬儀のやり方の違いは、考えや文化の違いでもある。

日本で立ち会った葬儀の中、仏教、キリスト教の色が濃く、儀式感覚の強いものもあれば、亡くなった方が長い期間を準備して、葬儀の参加者を楽しませるのもあった。よくても、悪くても、「おくりびと」のように、死者に対する思い、扱いが生きている人の考えや生き方そのままが反映されて、古今東西どこにおいても同然であるはずだ。が、中国においては、様子がだいぶ違ってくる。

ご存じのように、中国は広く、多くの種族、文化で融合してきた国である。近代まで土葬・火葬・水葬・天葬（チベット）など様々な文化、宗教を取り入れたやり方が存在した。清の末期、大規模なペストが起き、対策として感染地域の遺体をすべて燃やす政府決定に対して、各方面からの圧力が凄まじかった。それだけ土葬が主流だった。文化の面においても、今でも人口の九割以上を占める漢民族が、宋の時代から残った言葉「葉落帰根・来時無口」の葉落帰根（葉が落ちて、根に帰る）という考えがあった。

近代まで、この言葉が呪文のように、海外へ出稼ぎに行った中国人たちを支配し、高額な費用を捻出し、遺体を故郷に運び、埋葬する事業者を支えた。中国国内ならなおさら、何が何でも故郷の土に帰りたい一心で、遺体の運び屋が誕生した。映画キョンシーのもとである。一九四九年より共産政権ができ、一部の自治区を除いて、火葬以外認めない現代においても、出稼ぎ先で亡くなった、同郷の遺体を酔っ払った人と見せかけ、夜間バスに乗せて、連れて帰ろうとして、ばれて、ニュースになったくらい、葉落帰根が残っている。

前置きが長くなったが、現在の中国の葬儀はどうなっているのかというと、三つの葬儀をもって、説明する。一つは十七年前で、自分の親友だった。彼は特殊公務員（国家保安局、日本でいう公安？）で、結婚式の二日前に亡くなり、詳細は一切知らされていなく、家族以外は遺体との対面が禁止され、遺骨は政府関係者の遺骨置き場（番号で管理されたコインロッカーみたいな場所）に置かれ、遺骨入れの箱を国旗で包んだことから、箱の取り出しも拒否された。

僕が受けた学校教育は唯物論だったが、むしろマルクスさんの「すべてを疑え」を気に入っていた。彼の両親が、遺骨を墓に入れたいとの要望が却下された時もびっくりしたがそれ以上に、政府関係者がこの置き場が一般人のと比べて、格式が高いし、風水もいい、ここに置いた方が絶対にいいと言った時は、格式？風水？って笑うしかなかったな…結局、去年見に行った時はまだそこに置いてあって、そこは地元から遠く、彼の両親も高齢のため、妹さんを頼って、より遠い所へ引っ越した。どんな思いだったろうなぁ。

続いて、五年前の弟の葬儀。親友の時は、費用も含めて、全部国がやっていたので知らなかったが、弟の時は火葬費用５万元（当時大卒の初任給5,000元ほど）がかかった。また火葬場の数は、町によって違って、運営は大抵利権が絡んでいて、競争は存在しない。告別式は火葬場敷地内の小ホールで行われ、火葬場のスタッフが取り仕切る。宗教的なものや、故人の要望が基本通らない。弟嫁のお父さんが仏教徒で、式の最中でお経を唱えたことで、摘まみだされ、滑稽にさえ思えた。弟嫁もまた風水のいい墓地を20万元で購入し、弟の遺骨は今そこにある。その墓地もまた遠くて、うちの両親どころか、僕さえ行ったことない。

三つ目は中国広東省での話、昨年ビジネスパートナーの一人のお父さんが亡くなり、150万元ほどかけて、ちょっとしたイベントみたいな葬儀をやっていた。やはり中国の中でも南の沿岸地域は、経済的に発達している。火葬までは一緒であっても、そこから先は個

人の自由である。葬式ではお坊さんも道教の道士も呼んで、伝統衣装で式が行われ、お墓も地下二階で、家具などのミニチュアが一式揃っているとか…ホーホー、ん?!知っているぞ　これは。

西安では世界遺産である秦の始皇帝の兵馬俑があるが、あまりに観客が多いし、始皇帝の墓の5％に過ぎないことから、外国の友人には地元のある秦大公の墓を薦めている。それは、始皇帝の先祖代々の墓で、当時最高の格式「黄腸題湊」のレプリカを地下に復元し、展示しているからだ。その墓室には棺桶以外に、生活用品から家具など一式揃っており、復活?したら、すぐに生活できるようになっているとか。形が変わっても、中身は一緒だと思わんか?

日本にも多大な影響を与えた儒教であるが、漢の時代から権力者を取り入れることによって、大分違うものとなった。その思想の一つが「孝」が、もはや親孝行の孝というより、自分の君主を親のように、いや、親以上に扱えとなってきた。葬儀そのものがショーになり、自分が「孝」の人であることをアピールしたり、参列した人々の態度を表明する場になってしまう。

うちの両親が去年末から、揃って入院したりすることになってから、親子の間で包み隠さず話し合った結果、将来、僕の定住の地が決まったら、好きな蝋梅の木を植え、その根元に親の遺骨を埋めることになった。時代が変わっても、人の思いはそう大差ないと思う。

最後に少し国葬の話をしたい。古代では国王や国に多大な貢献をした将軍などの国葬に国民が自ら参列してきた。中国でもうちの親の世代では、政治家の国葬に自ら行動し、参列した。まさに国葬とは、その国の人々がその国にとって、最も大事な存在か、最も代表できる存在であろう。日本という自然資源の乏しい国において、お札に載っている思想家・文学者・科学者の中から、多大な貢献をした者を国葬すべきだと思っていた。

先日、フランスのある教師が授業で宗教的なことに触れたことから、テロに遭い、殺された。フランスでは国葬をやり多くの人々が参列し宗教がテロに利用された無知と戦った。そういえば、日本も先日亡くなって一年近く経つ政治家の国葬に、税金1億かけたそうだ。コロナの影響がなくても、自由の意思で参列した国民がとれほどいたのかなぁと考えたりするこの頃である。

1元：約17円
5万元：約85万円
5千元：約8万5千円
20万元：3,400,000円
150万元：25,500,000円

『盆法会～生命（いのち）の尊さについて～』

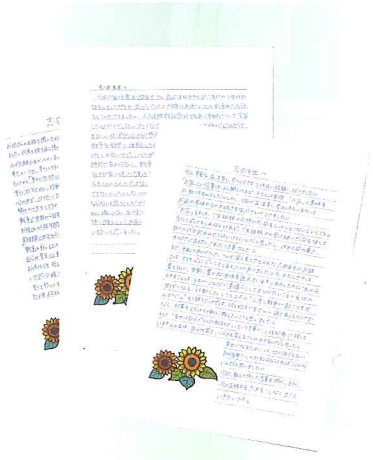
令和二年八月　榛名女子学園

今回の盆法要は二回目でした。前回は私たちと同じ年代の少女のお話をしていただきましたが、今回はご自身のお母さんとの戦争中のお話をしていただきました。八月は終戦記念日でもあり平和について学習したばかりでしたし、アニメなども見ていたのでその当時がどれだけきびしい状況だったのか想像をしながらお話がきけました。戦争を実際に体験した人でないと分からない気持ちの方が多いかもしれないけど、いつの時代もどんな人であっても命の尊さは、絶対に変わらない、戦争によって変えてはならないものだと思いました。そして印象に残った言葉は「幸せは自分の手でつかむ」です。だれかが与えてくれるものではない。与えてくれると思っている以上は自立ができないということなのかと私は感じ、まだまだ成長していかなければならないと思うことができました。自分のために、そして大切な人のために悔いのない正々堂々とした生き方がしたいと思いました。

また、日本人としてお盆やお墓参りなどそういう文化を大切に受け継いでいきたいと思いました。

（10代　女性）

この時の教誨師の話で三人の方から感想を寄せて頂きましたので記載させていただきます。



お坊さんのお話を聞いたのは、生まれて初めてでしたが良いお話が聞けたと思いました。何度も繰り返し強く言っていた「幸せは自分で掴むものである」という言葉はテレビの有名人などよく言っています。いつもいまいち理解できませんでしたが今回はピンと来たというか、幸せはそういうものだんだと学んだ気がしました。

私はよく「幸せになりたい。」と思っているのですが、そう思っているだけじゃなくて、なにか幸せになるた

めに行動すべきなんだなと思いました。

心の中で、なりたい・なりたいと思ってるだけじゃなくて、なれるために色んな努力や工夫をしようと思いました。

戦争で中国から日本へ来た時、飢え死にしそうなのを耐えてきたこと。お母さんが九十六年間後悔してきた小さなおにぎりのお話。

実体験であるからこそ、心に響くものがあり伝えられるものがあると感じました。「戦争はダメ。してはいけない。」そう思っているのなら行動にしなきゃいけない。自らが率先して動いていかなければいけない。そういうことを教えて頂けました。

お坊さんでも死にたくなることがあり、誰にでもそういうことがあると話していただいた時、お坊さんが死にたくなるのはどんなことだったんだろうと思いました。辛くて悲しくてなのか、ふっとくるものなのだろうか。でも、お坊さんみたいに生きてて良かったと思える日が来るまで私も頑張ろうと思いました。

全体を通して、お話を聞ける場に参加できたことが私にとって、とても良い経験となりました。

本当にありがとうございました。

（10代　女性）

今回、貴重な盆法要に参加できて、とても良い経験になりました。

「お盆」という言葉は、よく聞くけれど、わたしは実際「お盆」の意味をよく知りませんでした。しかし、今回の盆法要に参加するにあたって、お盆の意味やその大切さを学ぶことができました。

「お盆」それは、ご先祖様から頂いた命をしっかりとつないでいくこと。当たり前かもしれないけれど、ご先祖様から受け継いだ命を決して自分の代で終わらせてはいけないんだと思ったし、改めて命の尊さ、大切さに気付かされた行事でした。

また、平和のありがたさについて深く考えさせられた志田先生のお話では、とても心にジーンとくるものがありました。今、わたしたちは昔と比べ非常に豊かな生活を送れています。わたしたちにこれからできることは、それがどんなに素晴らしくてありがたいことかを次の世代へ伝え、行動していくことです。〝二度と戦争が起こりませんように。〟そう願うだけでは、何も始まりません。頭で考えるだけでなく何事もまずは行動に移していこうと思いました。

そして、「幸せは自分でつかみ取るもの。」という言葉がとても印象に残っています。人生は、自分次第でいくらでも変えることができるんだと思ったし、幸せになるためには、他の誰でもない自分自身でつかみ取らなければならないんだと思いました。

今回、教えて頂いた言葉を胸に、また今の気持ちを忘れることなく生きたいです。

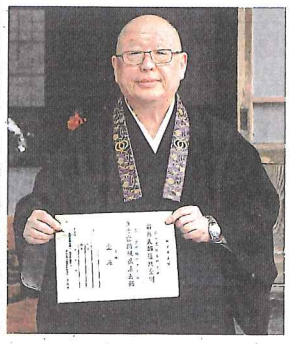
（10代　女性）

宝号 思いを込め書写を

宝号 思い込め書写を

23年に空海生誕1250年

金剛寺で記念事業



前橋

2023年に真言宗の開祖、弘法大師（空海）の生誕1250年を迎えるのを前に、前橋市の真言宗豊山派金剛寺が、空海の宝号「南無大師遍照金剛」などを書き写してもらう記念事業などを行っている。現在1250枚を目標に、広く参加を募っている。

書写運動として空海の宝号を、筆や筆ペンでなぞって書いてもらう和紙を特別に用意した＝写真。「疫病退散」や「諸願成就」「身体健全」といった祈願の目的も書ける。

同年には空海の石像を建立し、開眼法会も開く予定。志田洋遠住職(78)は「それぞれの思いを込めながら書写してもらいたい」と話している。

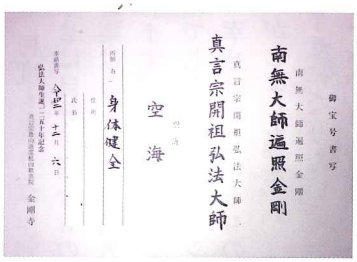
問い合わせは同寺（☎027・283・6918）またはホームページへ。

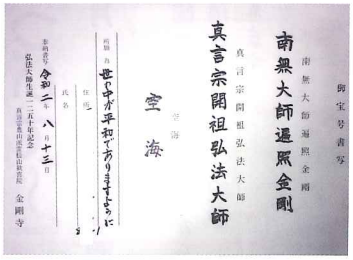
令和３年１月20日上毛新聞記載

広く参加を募っております。

お子様でも大人でもどなたでも参加してください。

その時思う心を…思いを残してみませんか？





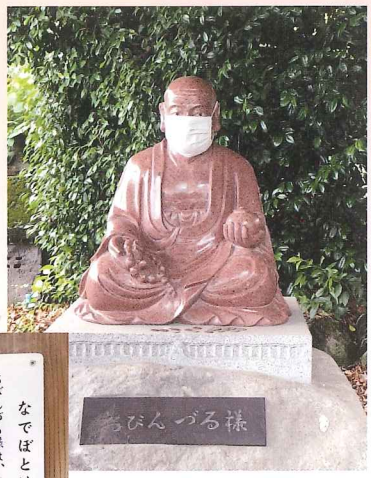
おびんづる様にお願い

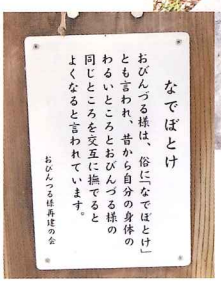
高坂　登
（前橋市・七十一歳）

知人から聞いていたおびんづる様を参拝するために、前橋市苗ケ島町にある金剛寺を訪ねた。寺の石門を入ると参道のすぐ左側に覆い屋があった。その中にコロナウイルス封じのマスクをして鎮座していた。おびんづる様は釈迦の弟子十六羅漢の一人で、その像をなでて病患部に触れれば病が治ると信じられ、俗に「なでぼとけ」ともいう。すぐそばの草陰には市重要文化財の標柱と共に、昔から信仰が厚かったことを物語るおびんづる様の古い石殿があった。その伝統を継承と継承して地域の人が新しく造立したのが、覆い屋の中平成生まれのおびんづる様だ。参拝を済ませてから台座の裏の由来を読んだ。「地域の安全と住民の無病息災を願いあわせて東日本大震災の被災地の鎮魂と復興を祈り…おびんづる様再建の会」と刻まれていた。民間の尊い信仰心だと思う。

金剛寺は十二の市重要文化財のある寺として知られ、石畳の参道と清浄な境内はコロナ禍のうっとうしさを払いのけてくれる。このおびんづる様が、これからの時代を生きる人たちに愛され、大勢が参拝してくれるよう願いながら帰り道についた。

（令和二年十二月八日　上毛新聞　みんなのひろば　掲載）





お坊さんからみんなへ質問

こんなしつもんをされたなら
みなさんはどう答えるでしょうか…
答えに詰まってしまったら…
こんな本はどうでしょうか？

鹿田文也様

当山責任役員を
永年勤めていただき
総代より感謝状授与。

長い間檀家役員
ありがとうございました。
令和３年１月15日

住職からのおすすめ本

題　名　たった独りの引き上げ隊
著　者　石村　博子
発行所　株式会社角川書店
定　価　七四三円＋税

題　名　空海の生涯
著　者　由良　弥生
発行所　株式会社　三笠書房
定　価　九八〇円＋税

題　名　近現代日本仏教の歩み
著　者　仏教タイムス社編集部　編
発行所　株式会社仏教タイムス社
定　価　一五〇〇円＋税

題　名　ゴミと呼ばれて
著　者　名林　一男
発行所　株式会社星雲社
定　価　一二〇〇円＋税

イチオシ！おすすめ！

題　名　はるのひ
著　者　小池　アミイゴ
発行所　徳間書店
定　価　一六〇〇円＋税

作者　小池　アミイゴ
群馬県生まれ

書籍・雑誌・広告等の仕事や音楽家との仕事も多数手がけている。

絵本『水曜日郵便局 うーこのてがみ』KADOKAWA

絵本『とうだい』（斉藤倫：文　小池アミイゴ：絵）福音館書店

などがあります。

編集後記

令和三年、創刊号から数えて十六号を発刊させて頂きます。

昨年から今年に掛けて、コロナ感染者の増加に戦々恐々とする毎日に、驚きと恐怖と落胆の思いです。

然しながら、国民の英知と勇気ある行動に些か驚きながら、日々を過ごしております。

コロナ渦の中で、オリンピック開催に疑問と驚きを隠せない状況です。今回の表紙に「夜空の月」と題して、潮地　龍勝師（福島県白河市・満徳寺御山主）に投稿お願い致しました。

正に感謝の一言です。

次に、外国との葬儀の違いを掲載致しましたら大好評でしたので、三年連続ですが本年も継続させていただきました。「葬儀の違い」と題して、金　哲煜氏に投稿して頂きました。金剛寺として、檀家さんと一緒に中国西安市「青龍寺」に参拝旅行した際に、お父上に通訳等で大変お世話になり『縁』とは不思議なものですね。

続いては、皆さん『教誨師』をご存じですか？未々世間で知られておりませんが、百年以上前から活動している団体です。榛名女子学園の三名の方に、『生命（いのち）の尊さについて』と題して感想文を書いて頂きました。学園のご協力・理解そして、園生の言葉に「生命（いのち）」の大切さを実感してくださる人がおられれば幸甚です。

最後になりますが、『おびんづる様にお願い』を上毛新聞で偶然拝読させて頂き、厚かましくも『道』への掲載許可を快くご承諾いただきました　高坂　登様のご好意に心から合掌させて頂きます。ありがとうございます。

昔から『人は一人では生きては行けない』と言われますが、正に愚僧もこの歳にして、実感するばかりです。

多くの方々に、陰に陽にご迷惑をかけながら、茲に発刊出来ます事に伏して御礼申し上げます。

追伸　この度、前橋市粕川町に縁のある童話作家　小池アミイゴ様の作品を紹介させていただきました。お子様に沢山の童話等に触れさせて頂けばと思い、ご紹介させて頂きました。

合掌

令和三年回忌一覧

一　周　忌	令和二年	
三　回　忌	平成三十一年	令和　元　年
七　回　忌	平成二十七年	
十三　回忌	平成二十一年	
十七　回忌	平成十七年	
二十三回忌	平成十一年	
二十五回忌	平成九年	
二十七回忌	平成七年	
三十三回忌	昭和六十四年	平成　元　年
三十七回忌	昭和六十年	
五十　回忌	昭和四十七年	
百　回　忌	大正十一年	

追善供養は毎年ご命日に行うのが本義です。この一覧表は、一般的に行われている年回表を表したものです。

ATCHING

いきいきまえばし人

行政相談委員　志田 洋雄さん　笛・上野町

今を生きる人に手を差し伸べたい

金剛寺住職の志田さんは平成3年度から行政相談委員を務めている。もともと寺の住職として住民の相談を受けることが多かった志田さんは、旧宮城村から打診があり相談委員になった。

「行政は未知の世界でした。最初の相談が解決したときにこの活動が村民のためになると実感した。やりがいを覚えました」と話す。

行政相談委員への相談は多岐にわたる。志田さんはその全てに真摯に向き合ってきた。

「相談を受けるとき根も大事なのは傾聴です。先入観を持たないようにして相手の話を聞くつもりで聞くこと。また、内容が事実かどうか必ず自分の目で確かめるようにしています」

「行政相談委員の活動を始めて本年度で31年目。定年の80歳まであと2年となった。

「この業務を続けてこられたのは、自分自身学ぶものや喜びが大きかったからですね。相談者のためにも定年まで務め上げたいです」と話す。

「現在、志田さんは自身でも人・相談員を募集している。相談員になる人も多い。長い付き合いになる人間。今が大事。セミナーに参加して生きている人たちのっと相談活動を続けい」と志田さんは語る意にこれからも多くの人がなれるのだろう。

行政相談委員として31年目
広報まえばし
6月号で紹介されました。